忍法伝　第16回

作・佐々木 守　え・岡本颯子

第十二章　改新への序曲

（一）

弓月（ゆづき）と若菜（わかな）が諏訪神社の神使として出発したのは、ちょうど大化の改新の一年ほど前にあたる。

前後左右を物々しい出雲族の戦士に守られつつ、かたく身を締めつけるいましめの中で、弓月はただ若菜のことが哀れであった。飛騨の山中で救ってくれた娘、しかもその若菜の部落は、銅鐸をあがめているところをみると同じ出雲族のかくれ里ではないのか。そのことをいくら告げても誰も信用してくれなかった。むりもない、八雲たつ出雲を追われ追われ信濃の山中にようやく安住の地をみつけた出雲族にとって、いまやヤマトの朝廷の名によって統一されようとしている日本の国は、文字どおり四面これ楚の歌といってよかった。

一行は、諏訪湖のまわりを黙々として歩いた。ただ先頭の男のもつ宝杖の先の小さな鈴の音だけが春の風にのって美しかった。それは単なる鈴ではなかった。形こそ小さいが、その形と音はまぎれもなく銅鐸のそれであることに弓月は気づいていた。

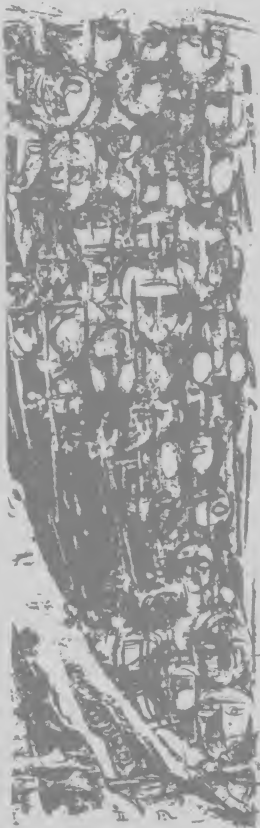
とつぜん、列の男たちの口から、「ホオーッ」というような深い嘆声が起こった。はっとしてみると、今諏訪湖の鏡の如き湖上から、もくもくと白い雲がわき上がっているではないか。ピシリ！　馬にむちがあてられ、弓月と若菜の馬は走り出した。男たちもとぶようにそのまわりを走る。

そして、白雲が完全に天へのぼったとき、弓月は見た！　湖上をへだてる向こうの小高い丘に一本、枝をはらわれた巨木が空へつきぬけるほど高くそびえているではないか。そしてその巨木のまわりに群らがる老若男女の群れ。「心の御柱」だ！　思わず弓月は小さくうめいた。ついに諏訪湖の岸に、銅鐸と心の御柱があらわれたのである。

「第一・峰のタタエ」

奇妙な言葉が先頭の男の口からもれた。

（二）

巨木の下の白木の祭壇。その上にまつられる銅鐸、そしてひざまずく

人々――　それと同じ光景を弓月は見ていた。それはいつか都から能登へ向かう途中の琵琶湖の岸辺でであった。そういえば、同じように、湖を控えたここの姿は、あまりに琵琶湖の時の様子と似ているのである。

　男たちに守られつつ、弓月と若菜の馬は、一気に丘をかけのぼった。

「神使だ」「神の子だ」集まる人々の口からささやきがもれた。二頭の馬は巨木(心の御柱)につながれた。そして宝杖を持つ男が、弓月に近づくと、いきなりそのひたいに巻かれた鉢巻状の白布に手をかけた。そこには白布に一枚の奉書がとめられていたのだ。

　宝杖の男はおごそかに読み上げる。「諏訪神社」の奉書――それは、本殿の境内で弓月がきいたものと同一の内容であった。

一、出雲族はいよいよ決起する

二、当面の味方として蘇我入鹿と語らった。

三　入鹿は天皇家と対抗するため、出雲族のかくれた力を利用しようと計り、ここに両者の結託は成った。

「皆さん、今こそ我ら日本古来の出雲族が立ち上がり、南から来た騎馬民族、ヤマトの朝廷を追いはらうときが来ましたのじゃ」

　わあーっと歓声が上がる。そして、宝杖を持つ男の声が終わるや、集まった人々は一斉に立ち上がった。みるとその手にはそれぞれ一本の青い竹がにぎられている。

「さ、御立座の神事じゃ」

　声と共に、人々はさっと弓月と若菜をとりかこんだ。あっという間もなかった。たちまち数十本の青竹はピシリ、ピシリ、はげしい鞭となって弓月と若菜のからだにくいこむ。

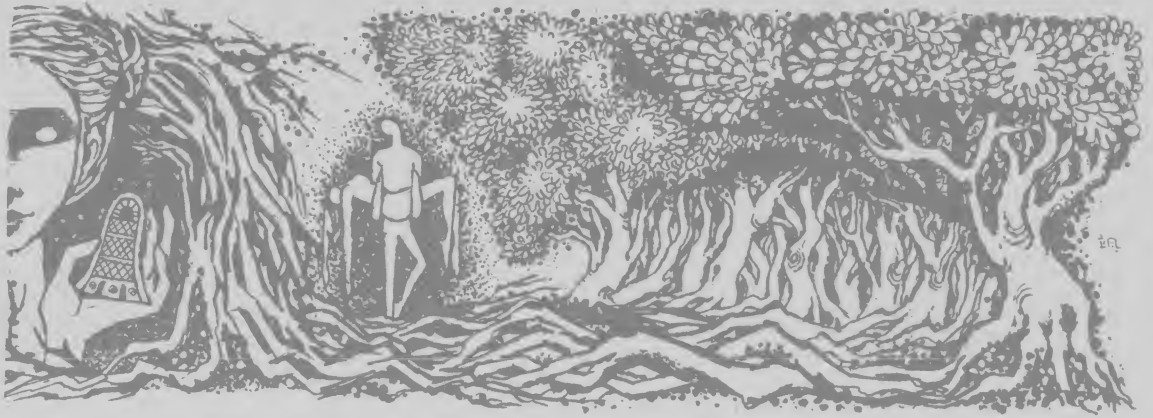
　うっ、声をこらえて弓月は若菜を見た。若菜も弓月を見ていた。しかし、弓月と目が合うと、安心したように目をつぶって痛みにたえた。その目が笑っているように見えた。

　皮が破れ、肉が裂けて血がとんだ。その血は、白い土器にうけられて、巨木の根元に塗られた。

「さ、出発じゃ、第二・檀のタタエへ！」

　宝杖をもつ男が、その先の小型の銅鐸をシャランと鳴らして叫んだ。

　その日から一週間、弓月と若菜の馬は、一日に一個所、巨木の立つ丘をたずね、七日のうちに七度、弓月と若菜は血を流した。

「諏訪神社物忌令」にいわく『古来多数のタタエあり。それは「湛」という字をあつるか否か定かならず。タタエは「讃詞」ともいう。いずれも明白ならず。ただ七つの「称木」

のみその存在を今に残す』と――。

すなわち七つの「称木」は次の如くだ。

桜タタエ（茅野市粟沢。遺跡あり）
檀タタエ（諏訪市真志野）
峰のタタエ（茅野市高部火焼岳頂・現在）
檜タタエ（茅野市玉川神の原七社明神境内）
松タタエ（諏訪市神宮寺上社本宮内今橋）
栃タタエ（諏訪市四賀神戸北小路、神木様）
柳タタエ（茅野市矢ヶ崎）

（三）

「しぶとい奴でござった」

宝杖の男が神官にうめくようにいった。七日七晩すぎた八日目の朝、諏訪神社の境内である。すでに七日前のあの興奮はなかった。そこは、巨木の森の中でおどろくほど静寂だった。

ただ、馬上に倒れふす弓月と若菜、それに神官、そして二人の神使を守る、男たちだけがひっそりとしてあった。

七日前、純白の衣だった弓月と若菜の着物は、今は全身から流れる血のために紅の衣とかわっていた。

「いましめを解け！」

男の一人が縄を切る。どうと弓月と若菜は大地にころがった。すでに若菜の唇は白くかわいていた。

「御立座の神事はじまって百年、はじめてのことじゃ。七日七晩の苦行に耐えぬいた若者は――」

神官はそういって弓月の方へ歩みよった。

「さ、どこへなと去れ！　それが諏訪神社のおきてじゃ。ただし、奉書の儀、他国にてはなせば、お前たちの命はないものと思うのじゃ」

弓月はよろよろと立ち上がった。そして、すでに呼吸なき若菜のからだを両手でかかえ上げた。そのまま二歩、また三歩、ふと弓月は足をとめてふりかえった。

「お願いがあります」

「なんじゃ」

「宝杖の先につけられた鐸、一つもらいうけたい」

「なにっ」

男たちが一瞬弓月に殺気をこめてつめよろうとした。

「まて！」

神官がとめた。

「よい。出雲族に見当たらぬ勇の者じゃ。褒美として一つ与えよう」

神官は宝杖の先から小さな鐸をとって弓月に歩みよった。

「さ、持ってゆけ。だが、他国で人目にふれさせるな。ヤマトの朝廷のもと、これをもつものは逆賊といわれる」

弓月はその小さな鐸をふところにねじこむと、今度は礼もいわず、黙黙と歩んだ。若菜のズシリとした重さが腕にいたかった。

（四）

唇に唇をかさね、舌をのどの奥までからみつけるように入れる。そして強く吸うと一度離れて深く息を吸い、こんどは同じようにして空気をのどの奥へ送りこむ。

もうどのくらいになるだろうか。

諏訪湖の岸うつ波はかろやかだったが、その波の辺におり重なって倒れる男と女には、そのさわやかささえ自分たちのものではなかった。弓月

はいま若菜をよみがえらせるのにすべてを集中していたのである。
　やがて、若菜の唇がぬれはじめ、胸にかすかな鼓動がきこえはじめる。弓月ははげしく若菜の全身の摩擦をはじめた。すでに弓月も若菜も半裸であった。いたましい全身の青竹の傷あとは、見るも無残にのたうっている。
　ふと、若菜の手が、腰のまわりの着物を胸もとへたくしあげるかのようにかすかに動いた。乙女の羞恥心が無意識のうちにそうさせたのであろうか。弓月はそれを見て、やっと安心したように若菜のからだから離れた。諏訪湖の水に口をつけ、清冽な水を、一杯に含むと、もう一度唇を重ねて若菜ののどへ送りこむ。そして、その唇が若菜の唇からはなれ、弓月が立ち上がろうとしたときだ。
「どうか、このままで」
　若菜が細い声で目をつぶったまま言った。
「このままで、ずっと、いつまでも……」
「………」
　若菜の目尻からホロリと涙の粒があふれ、ツーッと耳の方へ伝った。
「若菜」
　思わず弓月は呼んでいた。呼びつつ、弓月は心の底で違った名を思いおこした。それは能登で会って別れた玉櫛の名前であった。しかし、なぜか弓月はそのまま若菜の上へ自分のからだを重ねた。今は、ものを考えることさえいとわしいほど弓月は疲れていたのである。——諏訪湖のほとり、その葦のしげみのなかで、弓月はみずからの崩壊を感じていた。
　ふと、弓月のかたわらで、シャラン、シャランと小さな音が鳴った。風にゆれたのか、それとも、弓月か若菜のからだがふれたのか、さわやかなその音は、あの小さな銅鐸のそれであった。

（五）

　女帝はその日もなぜかこころたのしまなかった。皇極女帝、すなわちさきの天皇・舒明の妃である。女帝は自分の心の晴れぬ原因がわかりすぎるほどわかっている。そのたびに女帝は、「自分はまたふつうの女であり、母である」と思うのだったが——しかし、女帝の悩みは深かった。その原因は、単純である。自分の二人の皇子・中大兄皇子と大海人皇子の不仲である。力なき母が、専横限りない蘇我一族から、心身共につかれつつ天皇の地位を守ろうとしているのに、それを助けてくれるはずの二人の皇子が、その日の朝もまた、はげしく言い争いをしていたのである。
　中大兄皇子、十八才。大海人皇子、十三才。今朝の争いの原因の一つは、蘇我一族に関係していた。この年、蘇我一族は、甘樫の岡（今の奈良県高市郡明日香村豊浦と伝う）に邸宅を二つ作った。そして、蝦夷の家を「うえのみかど」、入鹿の家を「谷のみかど」と呼ばせた。伝えきいた中大兄は烈火の如く怒った。「みかど」は「天皇」の意ではないか。それを一朝臣が何たる不遜！　というのである。ところが大海人は兄のことばを冷笑したのだ。
「みかどとはもともと御門であり、単に門の多い家ということでしょう。よしんばそれが天皇を呼ぶことばに転じていたとしても、もともと私た

ちの祖先はよその国からやって来て、この国をのっとった、それだけのことじゃないですか。今さら天皇だのみかどだのといばってみても――」

大海人がそこまで言ったとき中大兄の平手打ちが大海人の頬に炸裂していた。

大海人はすっと立ち上がった。

「私は侵略者にはなりたくない！」

そして、大海人は皇居をとび出していってしまったのだった。

女帝の悩みは、今朝だけのことではなかった。二人の兄弟げんかは、この一年ばかりの間たえずくりかえされて来ていたのである。

そのころ、中大兄は胸のふんまんをぶっつけるようにして法興寺の槻の樹の下に開かれている蹴鞠の会に出ていた。中大兄は力一杯鞠を蹴る。はずむように陽光の中をとび上がる鞠だけが、今の自分の心をわかってくれるようま気がしていた。「侵略が何だ。侵略してとった土地だからこそ、今我ら騎馬民族はヤマトの朝廷のもとに合して一丸となり、日本統一のためにたたかわなくてはならないのだ。もし、出雲族が蜂起して、我ら騎馬民族がこの土地から追われたら、いったいどこに行くべき土地があるというのだ！」

昔、古い昔、シベリア、蒙古、パミール高原一帯に巨大な勢力分野を誇った騎馬民族は、その後の南下により、台湾、韓国を手中に収めつつ、ついに日本まで来た、だが、その間、すでに支那にあった随は、騎馬民族の本拠を襲い、さらに日本とつづく韓国にまで手をのばしつつあるではないか。

今や、騎馬民族は故郷なき民となりつつある。ならば、侵略してとった日本を、第二の故郷としなくてどうしよう。それが中大兄のこころであった。

そのおれの気持を、大海人の馬鹿め！　蘇我の権力主義者め！　どうしてわかってはくれないのか。

中大兄は力一杯、鞠を蹴る。と、力余ってか中大兄の皮鞋が足をはなれて宙に舞った。あっという間の出来事であった。中大兄の足は一瞬砂をふんだ。そのとき、まわりの貴族たちの間に拍手が起こった。落ちてくる中大兄の皮鞋をうけとめたものがいるのだ。その男は、中大兄にかけよると、だまってひざまずいて皮鞋をさし出した。中大兄はこの卑屈な男にムッと来た。ここにも一人、権力にこびる奴がいる。中大兄はだまって足を上げてその男の前にさし出した。男はチラと中大兄の顔を見たが、そのまま自分の袖で中大兄の足の砂をはらうと、ていねいに皮鞋をはかせた。

貴族たちは再び遊びに興じていた。皮鞋をはかせてくれた男は、すっと立ち上がると、中大兄の耳に口をよせた。ぷーんと口臭が匂った。しかし、中大兄は耳をその男の口から離すわけにはいかなかった。男は早口でこういったのだ。

「蘇我入鹿は、出雲族と結託したよしにございます」

中大兄の心は早鐘の如く鳴った。

「お前の名は何という」

男はふたたび口臭をただよわせながら答えた、「中臣の鎌足」――。

「よし、あとで御所へこい」

言いすてると中大兄は蹴鞠の仲間にもどった。もどりつつ中臣の鎌足と名のった男がニヤリと笑うのを目の隅にとらえた。

（六）

「さあ、来てみておがみなされ、この虫は常世の神でおわす。この神をまつる者には富が集まり、福が舞いこんで来ますぞ」

神主のような姿をした男がわめきたてる。その横に一人のあどけない顔をした少女が、犬山椒の木の枝をうやうやしく捧げ持っている。その枝に無数にはう緑色の虫。体長四寸余り、おやゆびほどの太さのその虫は緑色のからだに黒い斑点をうかせた蚕状の虫であった。

「さあさ、来なされ、富者になりたい者、長生きしたい者はわずかの喜捨をもって来なされ」

路傍で叫ぶ男と少女のまわりには人々がつめかけ、そして一人、また一人、銭を出し、酒をささげ、野菜を与え、家畜をもって来てかわりにその虫を一匹もらって大切そうに持ち帰るのだった。

「世が乱れれば、怪しい宗教が流行する。そは果たして誰の責任ぞ」

このありさまをながめながら、群衆の後から大海人皇子は、ひとりボソリとつぶやいた。

「お兄さん」

とつぜん少女が叫んだ。大海人ははっとした。少女がいつの間にか、自分の前に立ち、虫を一匹とまらせた犬山椒の小枝をさし出しているのだ。

「お兄さんきれいだから、これあげる」

少女のつぶらな黒い目が笑っていた。大海人はあわてた。

「あ、ありがとう」

反射的にうけとると、大急ぎでその場を離れた。

「何が常世の神だ。木に巣食う、ただの虫じゃないか」

音高く流れる飛鳥川のほとりへ出て、大海人は少女からうけとった虫を川にすてようとした。とそのとき、大海人は幼いが美しいうた声を聞いた。遠いうた声はこう聞きとれた。

「八雲たつ、
　出雲、白雲、海にたつ
　七重、地の雲
　八重、天の雲」

大海人は見た、うたいつつ近づく一人の少女、それはあの虫うりの少女ではないか。少女も大海人の姿を見つけると、一散に走って来た。

「虫をすてちゃだめ。常世の神をすてると一生、お兄さんからしあわせがにげてってしまうわ……」

本気でそう信じているのだろうか。少女の目に曇りはなかった。

「どこから来たのだ」

「ずっと東の国、富士川のほとり……」

そう答えて少女は大海人の腰の剣にちょっと指をふれてきいた。

「すごく立派な剣。えらいの？」

「うん？　ああ……」

皇子だと答えたらおどろくだろうな、と思いつつ、大海人は答えるかわりに少女にきいた。

「名前は？」

「額田王」

少女の黒い瞳がいたずらっぽく動いた。

（つづく）

カムイ伝が第1回から入手できます！

愛読者の渇望に応えてバックナンバー再版

非人カムイを絶望的な状況に陥れた因子は何か？
悲劇は、カムイ出生のときすでに始まっていた。
早やも二年余の歳月を数えた白土三平先生畢生の
大作「カムイ伝」を第１回からこの機会にぜひ！

―カムイ伝再版促進会―

既に品切れとなって、多くの愛読者から再版を切望されていた「カムイ伝」の第１回から第10回までを５分冊にして再版することになりました。その第１冊（第１回・第２回）を１月に、以後逐次発行の予定です。ただし、希望者頒布・限定出版の形をとりますので、書店では発売いたしません。ご希望の方は、お早目に下記へ直接お申込み下さい。

頒価 230円 〒20円

申込先・東京都千代田区神田神保町１－55　青林堂内　カムイ伝再版促進会

〈ガロ〉特別セール案内

バックナンバーの部

今、全国で爆発的な人気を呼んでいる白土三平の大河マンガ〈カムイ伝〉は昭和39年12月号から本誌に連載されております。この「カムイ伝」をさかのぼってお読み下さる方々のために、バックナンバーの特別割引セールを実施中です。ご利用下さい。

「カムイ伝・在庫セット」

40年９月号～41年６月号

10冊・１組　特価 1,300円

（〒１組・100円）

新刊予約の部

月刊雑誌“ガロ”を、**少しでも安く**、しかも**続けて読みたい方々の**ご要望にこたえて、次の通り**特別予約セール**を実施いたしております。

〈Ａコース〉　６カ月分予約前納の方には、800円に割引の上、「白土三平傑作選集」（130円）を無料進呈します。

〈Ｂコース〉　１カ年分予約前納の方には、1,600円に割引の上、「白土三平傑作選集」（300円）を無料進呈します。

★郵便料金の値上げに伴い、今後のご予約には送料（Ａコース・100円、Ｂコース・200円）を申し受けることになりましたのでご諒承下さい。

申込先・東京都千代田区神田神保町１の55　青　林　堂